

---

## 名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議な日々～part 3

春崎やよい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵とドラえもんズ〜摩訶不思議な日々〜 part 3

### 【Nコード】

N4673E

### 【作者名】

春崎やよい

### 【あらすじ】

名探偵とドラえもんズ〜摩訶不思議な日々〜、名探偵とドラえもんズ〜摩訶不思議な日々〜 part 2の続編に当たります！そちらを先にお読み下さい！ハチャメチャ展開になります！！一話一話完結になっています！

## あれから・・・（前書き）

此処で、ちょっと人物紹介。

今回の主役の一角である、工藤新一（17）／高校生（兼探偵）

ドラえもん。

要素が強

いです。

王ドラ・マタドーラ・キッド・ドラメッド・ドラリーニョ・ドラニコフ・ドラパン、そしてジェドーラ。今回まだ出てきていませんが出すつもりです。

のび太・静香・ジャイアン・スネ夫・快斗・平次、蘭、園子、和葉となっております。

それと、少年探偵団。

本編へどうぞ！！

あれから・・・

澄み切った青い空に浮かぶ雲を見ていた俺と服部は、工藤邸にいる。

組織との対決が終わり、やっともとの生活を取り戻してはや、半年。灰原も元の姿に戻っていた。これからは、真つ当な生活を送るといつて、日本を離れていった。宮野から手紙がたまに来る。

どうやら、楽しく暮らしているみたいだ。

歩美・元太・光彦も俺と宮野の事を聞いたときは、すっごく驚いた顔をしていた。

いや、性格には元太だけだな・・・歩美と光彦は、薄々気づきたいらしいが

それから暫く経ったときに服部に元の姿に戻ったと伝えた。そして久しぶりに服部と和葉ちゃんが東京に遊びに来た。

和葉ちゃんと蘭は、女二人だけで出掛けていった。今は、服部と二人で工藤邸にいる。

「なあ、服部。どこか出かけねえか？」

「どこかってどこにや？」

「そうだな、快斗の家にも行くか？」

「そやな。そうしよや！」

服部は、飛び起きた。俺もよしと起き上がった。

快斗は、あの怪盗キッドの本当の名前だ。組織壊滅のとき、手伝ってくれた。そして、アポトキシンのデータを灰原の元に届けてくれたのも、キッドだった。それから、暫くしてキッドが追っていた組織スネイクが捕まり、パンドラを壊すことが出来た。そして、俺たちは知り合い友達になった。

まあ、最初は快斗がキッドだったことを知って驚いたけどな。

此処は、江古田町。快斗が住む町である

黒羽邸を訪れた新一、服部は、快斗を探していた。家に言ってみれば、出掛けたと母親から聞いた。

「全く。快斗はどこで油売ってるんだよ？」

新一は、気だるそうに言う。それを聞いた服部は・・・

「俺やて、そう思うわ。快斗、一体どこにおるんや？」

周りを見て歩くが快斗の姿がどこにもない。諦めようと思っていたら、声が掛かった。

「あれ？新一と服部じゃん！」

新一と服部は、後ろを向いて声を掛けられた人物を見た。そこには、片手にアイスを持つ快斗の姿が・・・

「やっと、見つけたで！探していたんやで！」

服部は、起こり気味に言った。

「何？俺を探していたの？」

快斗は、滴り落ちるアイスをぺろりと舐めて言う。

「ああ、そうなんだ。家に行ったら、いないって言われてな」

へえ、そうなんだと快斗が言った。でも、それが服部をさらに怒らせることになりとは、気がつかない快斗。

「快斗おお！！！！お前、何も分かっておらんやろ！！どんだけ、俺が苦勞してお前を探していたことを！！」

「服部、落ち着けてとにかく、快斗の家に行こうぜ？此処じゃ、目立つから・・・」

そうだ。さつきから快斗・服部・新一に商店街の人たちの視線が集まっている。凄く痛い。新一は、一刻も早く此処から立ち去ろうと思っていた。

「そうだな。」

快斗を先頭にして、歩き始めた。

「新一にしてみれば、珍しいね。滅多に人前に出てこないのに」

確かにそうなのだが、今回ばかりは外に出たかったという事だ。今回、服部も遊びに来てれているわけだし。

「まあな。それにして、快斗の家は、涼しい」

新一は、エアコンが効いている快斗の部屋で寛いでいた。寝転がってちょうどいいときに快斗の母親がジュースとお菓子を運んで上がってきた。快斗の部屋を無造作に開けて、入ってきた。新一、服部の前に置いて「ごゆっくり」といい、速やかに退散していった。

「あれから、半年か。短いようで長かったな」

快斗がポツリと零した。新一が続けて言う

「王ドラたち元気かな？」

組織を倒し、そのあとすぐに王ドラたちは自分たちの時代に帰って行ってしまった。

みんなから王ドラたちの記憶を消したのだが、どうやら新一に効かなかったようだ。

「誰や？王ドラって」

「いや、なんでもねえよ」

（そっか。覚えてないのも無理ないか。）

新一は、ため息をつきました。

頭の中で横切る楽しかった日々。王ドラたちが来たことで、また友達が増えたのは事実だった。

会いたいなあと考えていると、机の引き出しがガタガタと動いていることに新一は気が付いた。

なあんだあとで見ていると、引き出しが思いっきり開いた。

なんとそこから、ドラえもんが出てきた。

ぎよっとした新一。寝転がっていたベッドを飛び出し慌ててドラえもんの元へ駆け寄った。

「ドラえもんどうしたの？」

「あれ？此処どこだろう」

道に迷ったのかな？と考えているドラえもん。

「ドラえもん？聞こえてる？」

うーんと困っているドラえもんは、新一は、容赦なく話しかける。けれど、ドラえもんは新一に気がつかないもよう。イライラしてきた新一は、ドラえもんに話しかけます。

「ドラえもん！ー！」

「わあっっ！ー！」

やっと気がついてくれた。ドラえもんは、声のした方角、視線をさまよわせると新一がいることに気がついた。

「久しぶりー！新一君、元気だった？」

「元気だよ。ドラえもんこそ、どうしたの？」

「新一君に会いにきたんだよー！のび太くん、来なよ」

机の中に呼びかけるドラえもん。そこに誰がいるのって思った新一。机から一人男の子が来ました。中学生にも満たない体つき。きつと、まだ小学生なんだろうと新一は思った。

「こんにちは」

「こ、こんにちは！ドラえもんがお世話になりました」

のび太と呼ばれた少年は、行儀よく挨拶をした。声が少し上ずっている。たぶん、緊張しているんだろう。

「僕は、工藤新一。」

「のび太です。え・・・っと、一時期ドラえもんがお世話になりました」

微笑んで見守るドラえもんは、前よりも大人っぽく見えた。

半年は長いもんなんだなと試行錯誤していると、新一の後ろにいる快斗から声が掛けられた。

「新一、誰？その人たち」

首を傾げて見ている。新一は、慌てて紹介した。

「こっちは、ドラえもん。隣にるのが、のび太くん。それで、色黒の男は、服部平次。俺にそっくりなのが、黒羽快斗。」

紹介をすると、どうもと頭を下げた四人。流石に四人も同じ部屋にいと窮屈になってきた。

そこで、新一が提案した。

「外行かない？此処じゃ、狭いし」

「そうやな。そしよか」

服部は、立ち上がり新一の言葉に賛成のようだ。快斗も立ち上がり、そうだなと頷き部屋を出た。

快斗が先に出ていてといいリビングに行った。出かけてくると母親にいい玄関に来た。

靴を履き、外に出た。もう、夕日はくれていた。時間がたつのが早きがる

暫く歩いていると、オレンジの髪をしたロボットが走ってきました。そのあとを角が生えたロボットが追いかけている。なんだ？と見て



いると二人がこっちに気がつきました。

「ドラえもん！のび太さん！」

「本当だ」

キキィッと急停止したオレンジと赤。ドラえもんのところに来ると、新一がいることに気がつきました。

「あれ、新一さんじゃありませんか！お久しぶりです！」

オレンジのロボットは、新一のことを知っている。けれど、新一はいまいち誰なのか分かっていません。それに気がついたのか、赤いのが言いました。

「新一氣が付いていないみたいですぜ？」

「そうですよね。無理ありません。忘草で記憶を消したのですから」

「違うよ！二人とも半年前のときの格好じゃないから、分からないだけだよ！」

ドラえもんが二人に言った。

「じゃあ、新一さんは私たちのこと覚えているのですか？」

「そうだよ！だって、さっき僕のこと覚えていたもの」

オレンジのがそうなんですか！と嬉々して言った。なにがそんなに嬉しいのだろうかと新一は思っていた。

ふと、空を見上げた快斗。

そこにありえない光景が広がっていた。なんと、絨毯にロボットが乗っていた。

快斗は、新一の裾を引っ張る。

「なんだよ？快斗」

「新一、上！上！」

快斗は、指を空に向かって指している。新一はとりあえず、空を見上げた。

「あれ？あそこにいるのって……確か、ドラメッド？それに黒い服を着て同じ色の帽子をかぶっているのって、ドラパン？」

新一に言われて、ドラえもんたちも空を見上げた。

「本当だ！ドラメッドとドラパンじゃん！おい、ドラメッド、ドラパン！」

赤いロボットが呼びかけた。空を飛んでいたドラメッドとドラパンは、下にいる仲間の声に気がついて降下してきた。

「久しぶりであるな、のび太殿、ドラえもん、王ドラ、マタドール。それに新一殿」

ドラメッドは、優しい口調で言う。ドラメッドの隣に座っている男、ドラパンは不機嫌な顔をしているようだ。邪魔されて気が咎めているのだろうか？こっちにいるときにドラメッドに告白したらしいからぶつぶつと何か言っているようだけど、無視した。

「これでは、ドラニコフとドラリーニョ・キッドだけであるな。」

ドラリーニョはともかく、ドラニコフとキッドどうしたである？遅いである」

心配そうなドラメッド。新一は、ドラメッドに話しかけた。

「探しに行く？ドラリーニョのことだし、どこかで迷子になっているかも」

「ありえるである。我輩、探しに行つて来るである。」

ドラメッドは、絨毯を出して乗った。宙に上がり、空高くまで上がつていった。上から探すのだろう

「では、私も」

ドラパンは、マントを広げ空に飛び立っていった。

元気だな」と空を見上げてみると、服部さんが何か言っているのを聞こえた。

「よっしゃ！そういうことやつたら、わいも手伝つたる！そやな？

工藤、快斗」

「そうだな。みんなで、手分けして探したほうがいいな」

「俺も賛成」

新一、快斗が立ち上がり「僕たちも手伝うよ」とドラえもんたちが言う。

「じゃあ、二チームになろう！この地区を知っているのは、服部・

快斗・俺だから」

「そうですね。じゃあ、私は新一さんとマタドローと同行します！」  
王ドラがマタドローを引っ張ってきた。

「快斗、服部。見つけたら、連絡くれ！」

新一は、そう言って王ドラ・マタドローと走っていった。

「じゃ、行こうか」

快斗たちは、ゆっくりとキッド・ドラニコフ・ドラリーニヨを探しに行った。

先に見つけたのは、キッドだった。見つけたのは、マタドロー。  
なんと、キッドは、迷子の女の子のお母さんを探していたのだ。しかも、新一たちの目の前で

「キッド！探していたんですよ！全く」

「王ドラ！それにマタドローも」

ぶつくさ言っている王ドラの隣を歩いてマタドローが呆れながら言っている。

「お母さんを探しているんだ。」

「はあ？」

マタドーラがすつとんきょんな声をあげました。王ドラも呆れてものも言えない顔をしています。

「さつと探してあげればいいでしょう？」

「そうも行かないんだよ。気がつけばいなかったんだって言うから」キッドの右隣では、小さな女の子の手を握っているのが、見えた。

新一は、その子を見てあれ？と訝しげに見ている。

それに気がついた王ドラが「どうかしましたか？」と聞いて来た。

新一が知らないわけありません。なんていったって、少年探偵団の仲間だった吉田歩美なのですから

いち早く、歩美が新一に気がついた。

「あ！新一お兄さん！！どうして此处に？」

「歩美ちゃんこそ！もしかして、お出かけしていたの？」

「うん！お母さんと一緒に！気がつくといなくなっていることに気がついたの」

どうしようと悩んでいるもよう。

早く見つけてあげないと

日が暮れ始めている。

と、その時。王ドラとマタドーラの四次元ポケットが光っていることに気がついた。

「ドラえもんからです！」

王ドラが四次元袖から友情テレカを取り出しました。それをタイムテレビに挿入した。そこにドラえもんのビックの顔が映し出された。「大変なんだ！ドラニコフとドラリーニヨを見つけたんだけど、女の子が行方不明になっているとお母さんがいるんだ！」

いきなりので、王ドラはびっくりしています。

「名前は？」

「歩美ちゃん！」

「その子でしたら、キッドと一緒にいます。さつき、保護しました」「本当！？良かった！じゃ、今から公園に来て！」

そういつて、切れた。

「と、いうわけです。良かったですね、歩美さん」

「うん、ありがとう！」

王ドラ・マタドローラは、四次元からタケコプターを歩美・新一に渡ししました。そして、公園まで飛んで行った。ドラえもんたちは、すぐに見つた。そして、歩美とお母さんは、再会して帰って行った。

「それにしても・・・ドラニコフとドラリーニヨが一緒にいるなんて思わなかったよ」

「そうだね」

「でも、見つかってよかった」

「そうやな」

上からドラえもん、のび太、快斗、服部と優しい笑みを浮かべて言った。

「みんな〜！」

空からドラメッドが絨毯に乗って現れた。公園にいるのを見つけてきたのだろう。そのあとからドラパンが来るのが見えた。地上に降りてきた。そして、ドラリーニヨの手を掴み

「心配したであゝる」

「ごめん、ドラメッド。」

いつものくつたいない笑顔を浮かべてドラリーニヨが言った。

「もう夜も遅いし、今日は俺の家に来いよ！」

快人が言った。

日は落ち、辺りが暗闇に包み込まれている。夜中に家に戻れば大丈夫だなと思った新一は、とりあえず快斗の家に行くことにした。

「いや。俺は、服部を連れて家に帰るよ。今日は、楽しかったよ」

それじゃなと快斗に背を向けて服部と新一は歩き出しました。取り残されたドラえもんたち。どうしようと思ひ、考えていた。結局、新一についていくことにした。

電車に乗って駅まで行き、駅から歩いて家に帰ってきた。そのはずだったのは、確か。けれど、ドラえもんたちが着いてきたことで、帰りは賑やかになった。

夕飯の準備をするのも面倒くさくなり、食べないで寝ようと思いい階に上がる階段を上がるうとしたとき、ドラえもんに呼び止められた。

「待つて！新一君」

後ろを振り返れば、人間の姿に形を変えたドラえもんたちを見た。

リビングにシートを引いている姿を確認した。

何をするんだ？と新一は見ているとドラえもんにグイグイと手を引っ張られていることに気がついた。シートの上に座ると、「食べたいものを言つて」とドラえもんに促された。

服部は、「洋食！」と言った。すると、洋食らしきものが出てきた。新一も食べたいものを言った。出てきたのは、「スパゲッティ」だった。イタリアンといえば、スパゲッティなのだろう。

そんなことを考えながら、食べていた。

あれから・・・（後書き）

今日、前回のを完結させて新しい章に入ります！

組織もので繋がっていましたが、今回はちよつと違います！組織が  
でてくることはありません！

何をやるのっていうと、元の戻った新一の高校生活をドラえもんた  
ちと一緒に送るハチャメチャな高校ライフを愉しんで読んでもらえ  
たらと思います。前から書いておいたのを機にして、つくつ  
ちやおうかなと思いました。

これから宜しく願います！

6月15日

春崎やよい

評価・感想お願いします！

そんなまさかな・・・（前書き）

今回、ジエドーラ登場です！しかも、新一のことが少し明らかになる！本編へどうぞ！



そんなまさかな・・・

今日から学校だと自分に渴をいれて、蘭と一緒に帝丹高校へ行った。このとき、誰も知らなかった。まさか、ドラえもんズが帝丹へ来ることなど

それを知ったのは、朝会のこと。

ピンポン、パンポン

『本日、8時45分より朝会を始めます。体育館に集合してください！』

という、連絡が入った。

全校生徒は、すぐさま体育館に集合した。生徒全員が体育館に入っただのを確認した。最初少し騒がしかったが、すぐに静まった。そして、朝会が始まった。

校歌斉唱し、校長先生の長つたらしい話を聞かされた。ホッとしているのもつかの間。

『えー、今日から新しい先生と留学生を紹介すると、マイク越しに聞こえてきた声が言った。

生徒がざわめきだした。先生が静かにするように言われ、静まった。壇上に上がる人を見て、新一は絶句した。隣で見ていた蘭とその後ろにいる園子は、平然とした顔をしている。

マイクを校長先生から受け取った先生は、自己紹介を始めた。

『ジエドーラ・サンチェスです。イタリアから着ました。家庭科を担当することになりました。宜しく願います』

見たこともない先生。髪は、天然なのか知らないが、スツとしていて整っている。

新任の先生かなと思っていると、補足があった。

『ちなみに新任のキッド先生とは、昔同じ学校に通っていました』  
そういい、隣の先生キッドにマイクを渡していた。

新一は、なんだって〜という顔をして驚いている。また工藤家に住人が増えるのかと思うと気が遠くなりそうだった。

『ドラ・ザ・キッドです！キッドって呼んでくれ！英語を担当することになった。よろしく』

気軽に言って、横にマイクを流していった。

『私は、ドラパン・シュバル。フランス語を担当する』

『我輩は、ドラメッド・アルバートである。音楽の助手することになったである。よろしく』

『僕、ドラニコフ・ヘンジェル。ロシアから着ました。よろしく』  
ドラニコフから留学生になることが分かった。

最初の部分、マフラーに覆われていて何を言っているのか聞こえなかったけど、微かに聞こえた。

ドラニコフってこんな声なんだと新一はじめて知ったという顔をしていた。

袖に隠れていた手を出して隣にマイクを渡した。

『私は、王<sup>ワ</sup>。中国から着ました』

『エル・マタドーラ！スペインから来た！』

このとき新一は、悟った。王はマタドーラの隣にいるようにして生徒のほうに回ったんだと、いつどんな場面に出くわしても対等な位置にいることにより、マタドーラを自分のそばにおいておきたいんだと

『僕は、ドラリーニョ！ブラジルから来たんだ！アミーゴ』

『僕、ドラえもん！生まれは、日本です』

と、うまい具合に自己紹介が進んで終わっていった。

新一は、生徒が増えるのかと思うと頭が痛くなりそうだった、蘭のこの一言を聞くまでは

「また、友達が増えるね。園子」

「そうね。いい男のいるみたいだし、彼氏ゲットしちゃうかな」  
なんて、会話交わしているし。

とくに園子。お前、京極真さんがいるだろうと迷わず突っ込みたくなるようなこといつているし。

まあ、突っ込む気もないが・・・

「えー、留学生は、2・Bに編入することになった。」

この台詞を聞いて新一は、叫びたくなった。でも、此处で叫んではいけないと思い叫ばなかった。

教室に戻ってきた新一たち。

先生が教室に入り留学生にまたみんなのために紹介をするように言った。

「王です。よろしくおねがいします。特技は、カンフーです。宜し

くお願いしますね」

王は、男の子の制服じゃなく、女子の制服を着ている。壇上に上がっているとき気づかなかったが・まあ、似合っているからいいとして。それに一度、前にも女子の格好して帝丹小学校に通っていたもんなとそんなことを思い出していた新一。

「俺は、エル・マタドーラ！宜しくお願いするぜ！趣味は、シエスタ」

マタドーラは、簡単な自己紹介をして終わらせた。そして、お次はドラリーニョ。どんな自己紹介をするのだろうか

「僕は、ドラリーニョ！ブラジルから来たんだ！よろしくね、アミーゴ！」

それで一気に女子の票を奪った。可愛い笑顔が浮かべて女子は、可愛いという悲鳴を上げて騒ぎ立てている。先生の注意があり静まった。

ドラニコフがおどとした口調でしゃべり始めた。

「僕、ドラニコフ・ヘンジェル。ロシアから着ました」

「僕は、ドラえもん。生まれも育ちも此処、日本です」

こうして、朝のHRは無事に終わった。

HRが終わると、転入生の周りにクラスメイトが集まっていた。

新一は、無視して休み時間を堪能していた。けれど、束の間。みんなは、それを許さなかった。

クラスメイトの一人が王・マタドーラ・ドラリーニョ・ドラニコフ・ドラえもんどこに住んでいるのか聞かれていたのだ。まさか、住まいについて聞かれるなんて思わなかった王は、素直に言っ

ったのだ。それが新一を悩ませるとは気づかずに・・・

「私たちは、新一さんの家にステイさせてもらっているんです。」  
そう、さらにと。もちろん、美形な女性と男性に囲まれて暮らしている知れば、クラスメイトは黙っていないだろう。

「おい、工藤！ずりぞ、一人だけ言い思いしやがって！毛利という妻がいるくせに！」

「ちげ・・・！蘭とは、ただの幼馴染だっていつているだろう！」  
新一は、ガタンと勢いよく立ち上がり抗議の声をあげた。

そして、王たちの視線は一気に蘭に釘付けになった。その視線に気がつかない蘭。

「へえ、新一やるなあ。まさか、蘭さんが新一の恋人だったなんて」  
エルがおどけた口調で新一を茶化した。だが、それが新一の神経を逆なですることとはしらずに・・・

「マタドロー？今なんつて言っただのかな？」

どす黒いオーラを纏って新一は、マタドローに視線を向けながら言った。

クラスメイトは、それを見て安全な場所に避難していた。

たぶん、工藤は怒っているなと分かった上で。それに気づかないマタドローは、馬鹿としかいえない。

（新一さん、もしや怒ってる？）

王・ドラえもん、ドラニコフ、お茶らけているがどんな状態か把握したドラリーニョは、気がついた。

王は、マタドローを引っ張った。

「ちょっと、マタドロー。言っではいけませんよ。あなた、知っているでしょう？新一さんは、志保さんと出来てるのですから」

王は、新一にみんなに聞こえないくらいの大ききでマタドローに耳打ちをしていた。

「そういえばそうだった。」

マタドローも声を潜めて言った。

マタドローは、新一に向き直り謝った。

「ごめん、謝る。茶化して悪かった」

度肝を抜かれた新一は、

「分かればいいよ」

と、だけ言って座った。新一の怒りは、静まった。

一時間目の授業のチャイムがなり、みんな席に着いた。

王とエルは隣の席で、ドラリーニヨとドラニコフが隣の席となり、ドラえもんが四人の後ろの席となり一番後ろの席に座った。

最初は英語の授業。そう、キッドの授業。

金髪で普通より少し長い髪を三つ網にして後ろで一本にして結わえている。

キッドの授業は、順調に進んで行った。王たちも楽しく授業を受けている、特に王が

マタドーラに関しては、グースカと寝ていた。まあ、キッドが無理やり起こし問題を解いてみると言わんばかりのことをしていたが・

・  
ドラえもとドラリーニヨ・ドラニコフは大人しく授業を受けていた。

そんなこんなで英語の授業は終わった。

休み時間になり、キッドは職員室に戻っていった。

「キッドの授業、楽しかったですね！分かりやすく解説を入れたり  
と」

「そうだね。ドラリーニヨ、どうだった？」

ドラニコフがドラリーニョに話しかけて見ると意外な言葉が帰って来た。

「面白いのはいいけど、もう少し早くてもいいと思うな。」

「そうですか？ちようどいいくらいだと思いますけど」

「キッドのわりには、俺に良く当ててきたもんだけどな」

「あなたの場合、寝ていたからでしょう！？全くマタドーラは・・・」

と、後半部分は王とエルで喧嘩が始まっていたが・・・そんなことは置いておいて。

ドラリーニョがそんなことを言うのは、珍しいと思いドラえもんがドラリーニョと話していた。

「どうして、そんな風に思ったの？」

「丁寧に教えているのは、いいけどやっぱり速度が遅いんだ。」

みんなには、ちようどいいくらいだと思うけどねなどとドラリーニョが言う。

「分かった！ドラリーニョは普通なんだ！普段ブラジルで聞きなれているからだよ、きつと！」

「そういえばそうかも。聞きなれているから、遅く感じるんだ。ありがとう、ドラえもん」

そうして、この休み時間は英語の話で盛り上がって終わった。

二時間目は、ドラパンのフランス語学が始まった。

ドラパンは、本鈴と同時に教室に入ってきたので、すぐに授業が始まった。

フランス語が始めての授業で取り上げられるとは新一は考えていた。「フランス語がどうして、取り上げられたのか疑問に思っているやつらがいると思うが説明をしておく。校長先生のたつての希望だそうだ。」

ちなみにフランス語だけじゃなく、フランスの歴史から全部、勉強してもらおう。テストで重要な部分だけ出すからな。それと毎日、少しずつ前の時間やったことを小テストとして出題する！」

とっても長い前置きを言ってからドラパンの授業が始まった。最初、勉強の話を聞かされたことに寄って、ゲーと思っている生徒が何人かいた。

授業が始まって、充実している授業。とっても分かりやすく、丁寧に黒板に板書して説明をしてくれた。その年に何が起きたのかとか、その年の出荷はどうだったとか、フランス語で話し、それはどういう意味だとか。

チャイムがなる五分前に終わり、次の時間の予告をした。

「次は、来週の火曜日にある。授業が始まったらすぐに小テストを行う！ちゃんと、復習をしないと点数が取れないからな。それと赤点以下の奴らは放課後、またテストを行う！覚悟してかれ。以上」最後の五分間たっぷり言って、チャイムがなり号令が掛かると、すぐに職員室に戻っていった。

ぴしゃりと閉められた2Bの教室からは、悲鳴と絶叫が入り混じった声が上がった。

ドラパンの授業は、楽しいがとっても難しい授業であることがわかったのであった。



休憩時間が終わり、三時間目の授業となった。

三時間目は、担任の先生の授業数学であった。みんなゆっくりとした数学の授業を受けたのでした。

キンコーン・・・

「今日は、ここまでにする」

号令が掛かり、休み時間になった。

「結構、数学楽しめました。次は・・・音楽ですね。ドラメツドの授業。」

王は、四時間目の授業がなんなのか確認した。

音楽の教材を手にして、みんなと一緒に教室を出た。ドラえもん・ドラニコフ・ドラリーニョ・マタドーラは、蘭に園子、新一に音楽室に連れて行ってもらった。

音楽室に到着した新一たち。ドラメツドを見つけた王たちは、ドラメツドと休み時間の間話をしていた。それをみていた蘭・園子は、六人に近づいて話の輪の中に入った。

「王さん、知り合いなの？」

「はい、そうです。私たち同期なんです。友達なんです。」

「へえ、そうなんだ。ところで、王さんは誰が一番好きなの？私はマタドーラ君がお似合いだと思うんだけど・・・」

王は、いきなり聞かれたことで顔を真っ赤にした。そして、園子に抗議した。

「何言っているんですか！？マタドーラとは、恋人なんかじゃありませんん！」

真っ赤になって否定しているところを見ると怪しいものだ。でも、それ以上詮索しないことにした。こういうものは、黙ってみている

のが一番面白いと本人はいう。  
そうして、この休み時間は過ぎていった。

「今日から音楽の助手をすることになったドラにメッド・アルバートである。よろしくである」

ドラメッドは、腰まである長い髪を上でひとつにしてポニーテールにしていた。服は、着せ替えカメラで撮られた服、上はブラウス、下はシルクの長ズボンを着ていた。

自己紹介が終わり、授業に入った。

今日は、新たな歌を歌ことになり、それを練習することになった。

みんな一斉に歌いだした。新一の隣で歌っている男子生徒は笑いを堪えて歌っていた。これが、音を外している。新一は、サッカーが得意なのだが、音楽がからきしダメなのだ。

これまた、ドラメッドも笑いを隠せなかった。

「くくく……くくく……」

「ドラメッドさん？大丈夫ですか？」

音楽の先生が話しかけた。

「平気……じゃないである。工藤君、お主何とかならないであるか？」

ドラメッドは、おなかを抱えて笑っていた。そうとう、限界らしい。目には、涙を浮かべている。

ドラメッドじゃなく、王、ドラえもん、マタドーラ、ドラリーニョ、普段あまり笑わないドラニコフまでも笑っていた。特にマタドーラが大口開けて笑っていた。

「あははは！！まさか、新一音痴だったなんてな。サッカーは、得意なくせに音楽がまるつきしダメなんて知らなかった」

「マタドーラ、笑っちゃ悪いですよ。」

「王だって笑っているじゃないか！」

マタドーラが王に突っ込んだ。

まあ、新一の音痴は今に始まったことではない。こうして、音楽の授業は刻一刻と過ぎていった。

放課後になり、新一たちは帰宅した。

蘭と園子と途中まで一緒に帰り、そのあと分かれた。

王は、工藤家に帰って来た一言目がこうだった。

「今日は、楽しかったです。皆さん、優しい方たちでした」

「そうだね。」

「とても楽しかった!」

「おう、俺も結構楽しめたし。それに新一の新たな一面も知ることが出来たしな!」

一番上は、王、次にドラえもとドラリーニヨがいい、最後にマタドーラが零した言葉。

「うん、僕も楽しめたよ。」

と、ドラニコフが感想を言った。

それを見て、新一は微笑んでみていた。

(みんなが高校生活を楽しめてよかった)

その日、夕飯前までにキッド・ドラパン・ドラメッドがジエドローを連れて帰って来たのは、言うまでもないことだ。

夕飯のときにジエドローと新一は、紹介された。

その日就寝したのは、十二時を回った頃だった。

そんなまさかな・・・（後書き）

五日ぶりの投稿となりました。これだけ長い文章書いているとどうしても、時間が掛かってしまいます。

私の中では、三日に一回投稿みたいな規則があります。けれど、長い分だけ時間が掛かってしまいますので、ご了承ください。

感想・評価お願いします！読んでいて気がついたことがありましたら、お知らせください！！

6月21日

春崎やよい

帰って来た・・・

ドラえもんたちが工藤家に着てから、一ヶ月が経っていた。

志保もあれつきり、手紙をよこさなくなっていた。新一が志保になにかあったのだろうかと心配していた。

「志保、どうしたんだよ？手紙よこさないなんて」

今日は、学校がなく家でゆっくり過ごしていた。

月に一度、志保から手紙が必ず来る。

朝リビングに下りてきて玄関に出て、郵便物が来ているかどうかチェックしに出た。けれど、志保から手紙が来ていないことで新一は、心配していた。朝から、リビングを行ったり来たりしていて、落ち着かない様子だ。

それを見ていたドラえもんたちは、

「新一さん、どうしたんだろうね？」

などと、お茶を飲みながら新一を見ていた。

「さあ？でも、何かを待っているのは確かですね」

王が静かに言った。

今、工藤家にいるのは、ドラえもん・王・キッド・マタドーラとなっている。

ドラパンとドラメッドは、二人で外出していて、夜まで帰ってこない。

最初、二人が出かけると知ったとき、

「デートだな。」「デートだね」

と口々に言っていた。ドラパンは、普段着ている服と打って変わって、清らかな服を着ていたし、ドラメッドもオシャレな服を着ていた。二人が出かけて言った後も、会話が續いていた。

それから、暫く時間が経ち。ジェドーラは、ドラニコフと一緒に買出しに出かけて行った。今夜の夕飯のお買い物とジェドーラが作るだろうと思われる、お菓子の材料を買いに出かけた。

ドラリーニヨに関しては、部活に行っていた。留学と同時にサッカー部があると聞いて、入部したそうだ。ドラリーニヨは、家にいないことが殆どだったから、みんな何も言わずに送り出していた。王と一緒に暮らすのだから、誰が何をやるのか決めましようという提案を出した。

それで決まったのが、こうなった。

ジェドーラは、料理全般。王とドラえもんは、洗濯をし、キッドとドラニコフは、掃除。マタドーラとドラパン・ドラリーニヨは、特にやることがないため、何かあった時手伝うことになった。決めたとき特に異議がなかった。

そして、新一は何もやることがなくなった。

まあ、ゆっくりと過ごすことができるようになったのは、当然だが3時になると、ドラニコフとジェドーラが帰宅した。

「ただいま」

「お帰り、ジェドーラ、ドラニコフ」

ドラえもんが帰って来たジェドーラとドラニコフのもとに駆け寄ってきた。

両手に持った荷物を見て、ドラえもんは持つよと言った。

「大丈夫ですよ。」

ジェドーラがそう言ってドラニコフと一緒に台所に向かって歩いていった。

行き場のなくなったドラえもんの手は、空中で彷徨っていた。

ま、いつかとドラえもんは、ソファに座り直した。そして、冷めてしまった紅茶を飲み干した。

ピンポン……

工藤家のチャイムが鳴らされた。

疲れて上に行ってしまった新一は、二階に行ったきり降りてこないようなので、玄関の近くにいたドラえもんが出た。

「はい、今行きまーす！」

玄関を開けたドラえもんは、最初誰なのか分からなかった。

「え・・・と、どなたですか？」

明らか、始めてみる顔だなと思って見ていた。けれど、その顔は前見たことあるような顔だった。

すぐに思い出せない

「工藤君は、いますか？」

赤髪かがった髪を持つ女性が言った。

「はい、いますよ。上がってください。」

ドラえもんは、その女性を中に通した。

リビングに案内して、二階に上がり、新一を呼びに行った。

リビングで待っていると、二階から新一を連れてドラえもんが降りてきたところだった。

女性は、ソファに座って待っていた。

「工藤君、久しぶりね」

女性は、新一を見て工藤といった。

新一は、その声、姿を見て驚いた顔をして数秒動かなかった。

（そんな、まさか）

階段を折りきって新一は、女性に向かって歩き出した。

「み・・・やの・・・宮野！！」

新一は、宮野と言った。

久しぶりだ、あれから半年以上経っていたのだから、もう帰ってくることないと思っていた。けれど、実際こうして目の前にいるのだ。

新一は、目の前にいる女性・宮野志保を思いきっし抱きしめた。

志保も新一の背中に手を回して、抱きしめ返した。

「工藤君、ただいま」

「お帰り、志保！」

新一と志保は、暫く抱き合ったままだった。



台所から戻ってきてみれば、新一と女性が抱き合っているのを見て、ジェドーラとドラニコフ・王・マタドーラ・キッドは、固まっていた。

ドラえもん以外がどうして、台所にいたのかというと。

ジェドーラとドラニコフは、買ってきたものを冷蔵庫に入れていた。そこへ、王とマタドーラが新しく紅茶を淹れるべくやってきた。今度は、トイレに行っていたキッドが戻ってくるときになんか、食いものがないか探しに着たのだった。それが重なっただけだった。

「ドラえもん？これは・・・？」

「新一さんの知り合いみたいだよ」

ドラえもんは、王に振り向いて言った。

自分もどいう事態なのか全然飲み込めていなかった。目が助けてついている。

ようやく、離れた二人。

新一は、志保のことをここにいるみんなに説明しようとしているところだった。

「みんな、紹介するよ。灰原哀だった宮野志保さん。」

それを聞いてみんな、驚いた顔をしていた。

そして、半年以上前に起こった後のことをみんなに話した。元に戻った志保は、アメリカにわたっていたことを。

「そうだったんですか。でも、良かったです。お二人とも元の姿に戻っていて」

王が微笑んで言った。

ドラえもんが台所で淹れてきたコーヒーを志保に差し出した。

「ありがとう」

一口喉に通したコーヒーは、久しぶりだった。

「数時間振りね。」

そう言っただけで、一口ずつ口に含んで飲んだ。とても幸せそうに話が終わると、志保は席を立った。

「じゃ、私一回向こうに戻るわね」

「え、向こうって」

「博士の家よ。博士にも帰って来たこと伝えないとね」

そう言っただけで、志保は工藤家を出て行った。

帰って来た・・・（後書き）

来週からテストなので、お休みします！ご了承ください！

そのため、早めに更新しました。

次回は、7月7日になると思います。その日は、七夕ネタを投稿します！

6月23日                      春崎やよい

評価・感想・ダメだし（何か気づいたこと）がありましたら、願  
いします！！

## 七夕パーティー

一年に一度、彦星と織姫が会える日が七夕。  
その日も今年もやってきた。

志保が帰ってきてから二日が過ぎた。

ついこの間、出かけた先のデパートで志保と偶然会った。その時、今度七夕パーティーが行うから来る？と誘われた。もちろん、新一の答えは「YES」だった。

そして、今日7月7日。現在、阿笠家では、新一・志保・蘭・園子・服部・和葉・快斗・青子・小五郎・英理・優作・有希子が集まっていた。園子から、連絡を受けた警察の方たちも着ていた。それだけじゃなく、ドラえもんたちも着ていた。

「今日は、みんなで七夕パーティー。豪勢なものね」  
「そうですね」

佐藤・高木両刑事が話している後ろでは、白鳥刑事・目暮警部が立っている。

ちなみに、四人がいる現在位置は、阿笠邸の目の前だ。

さあ、これからチャイムを押そうとする手前、中から扉が開かれた。「やーっと、着た！今から、始めようと思っていたところなんですよ！！さあ、入った入った！」

園子に言われて、高木・佐藤・白鳥・目暮は、中に通された。リビングに来ると、工藤家全員が集まっていた。家族全員でいるところなんか、見たこともなかったから凄く新鮮な感じがした。それだけじゃない、毛利家も揃っていた。まあ、この家族と一緒に

いるのは何度も見ていて、見慣れていた。

それに。此処に快斗の父親・盗一、青子の父親・銀三がいれば、ものすごいことになっていた。

快斗の父親は、七年前に死んでいる。スネイクに殺されて

これは、快斗本人から聞いた話

この後、銀三が来ると青子が言っていた。

「ゲッ！来のかよ！」

この後、キッドの衣装着てマジックを披露と思っていたのに、と心の中で思う快斗。

パーティーが始まり、一時間したころ、阿笠邸のチャイムが来客を知らせた。

「いやー、遅れてすまんすまん」

頭をかいてリビングに銀三が入ってきた。志保は、皿に適当に盛り付けて、渡した。

「どうぞ」

愛想笑いを浮かべて

「ありがとう、志保さん」

銀三も笑い返した。そんな二人のやり取りに新一は、ムツとしていた。

「志保さんの料理は、いつ食べても美味しいぜ！」

マタドローが言う。そんな彼の隣で、楽しそうに食べている王は、ドラえもんと話をしていた。

「今日は、人が多いですね」

「そうだね。なんせ、七夕パーティーだから」

キッドは、ドラニコフと一緒に席に着いて食べていた。やっぱり、席に着いて食べないと落ち着かないらしい。

ドラリーニョは、もう飽きてサッカーボールで遊んでいた。

ドラパンとドラメッドに達しては、アーンして食べさせていた。最初、それをみんなの前でやったとき、啞然としていた。でも、普段から見慣れていた新一にとっては、なんともなかった。

（やってる。まあ、俺には関係ないもんな）と。

そろそろ、終盤に差し掛かってきた。

快斗は、そろそろいいかなと思ひみんなに呼びかけた。みんなは、快斗に注目した。

「さあ、今夜もそろそろ終わります。皆さんには、存分に楽しんでもらいましょう！黒羽快斗、この私が皆さんにイリユージョンをお見せいたしましょう！」

快斗は、普段着から白のシルクハットにマントに着替えた。そして、いつもつけているモノクルをつけて、キッド口調にしゃべり始めた。そして、いつものお得なマジックで観客を圧倒させる。

そう、まるで黒羽盗一のように

将来は、プロのマジシャンになるため

もちろん、そんな快斗の格好を見れば、彼の怪盗キッドのように間違われることも間違いなし。

「怪盗キッド!？」

「私は、怪盗キッドとは違いますよ。ただのしがないマジシャンです。」

帽子のふちに触れて言う。まさに怪盗キッドそのものだ。

銀三の開いた口が閉まることがない。

有希子は、知っていた。彼があゝの黒羽盗一の息子だという事を。そして今日此処で、マジックを披露するという事も分かっていたはず。快斗のマジックも終わり、夜中に差し掛かっていた。蘭たちも帰り、志保・新一・博士・ドラえもんたちは、パーティの片づけをしていた。ドラリーニョに至っては、すでに寝ていた。

ドラリーニョは、工藤家に戻る有希子たちに任せた。

「悪いのお、新一」

「別にいいよ。たまには、しないな」

新一は、ドラえもんたちを見た。いつもは寝ている時間なのに、眠そうな顔一つもしていない。

心から礼を言わないとな

志保も思っていることだった。

今年も織姫と彦星、会えて良かった。

願い・・・

王ドラの願い。

私は、紙に短足が直るように

そして、もっとマタドローと・・・その・・・いられるようにと、  
書きました。

それ以上は、恥ずかしくて書けませんでした。

だって、そんなことをしたら顔が真っ赤になってしまっからです。

マタドローの願い。

王ドラといつも一緒にいられることだぜ！

それと、皿を割らないことだ！！

それ以上、欲張ることなんてないからな！

ドラメッドの願い。



いつまでも、みんな仲良くいることである。

それと。ドラパンとの関係がもっと発展したいである。その・・・キス以上のことがしたいである。誘ってはいるのであるが、ドラパンが手を出してこないのである。悲しいである。

ドラパンの願い。

私は、とくにお問い合わせすることなんてない！

けれど、これだけはどうにも出来ないから、お願いしたい。

ドラパンとの関係を発展したいのだ。キス以上のことをしたいと思っているのだが、自分で自分を止めてしまつ。理性を抑えてしまつてどうしようもできないのだ。

ドラリーニョの願い。

僕？僕はね、ドラパンが消えて欲しいかな。

だって、ドラパンがいるとドラメッドを独り占めにするんだもん。

ずるいよ。僕もドラメッドのことが好きなのに・・・！だから、ドラパンに消えてほしいんだ。お願いします！！

キッドの願い。

そうだなあ、俺の願いは・・・やっぱり、ドラミといつまでも恋人でいられることかな。  
だって、それ以外にないもんな。

ドラニコフの願い。

ないよ。だって、欲しいものはたくさんあるから。  
強いて言えば。みんなの前でドラ焼きが食べられるようになることかな。

ドラえもんの願い。

そうだなあ。毎日、ドラ焼きがたくさん食べられることかな。それ

とネズ・・・（言いたくない）が絶滅して欲しい。本当にマジで！  
それと、キッドとドラミがいつまでも、幸せに暮らして欲しいこと  
かな。だってさ、一応兄としてはドラミに幸せになってほしいし。

そして、新一と志保は・・・こんな願いを書いて七夕に吊るしました。

「いつまでも志保といられますように」

「いつまでも新一といられますように」

だった。

この二人には、絶対幸せになってほしいと思う、王たちなのでした！

願い・・・（後書き）

今日は、七夕ということにまつわる話を書きました。  
どうでしたか？

楽しめたら、幸い嬉しいです。

感想・評価してくださると、とても嬉しいです。

本日は、これにて終わりです。次回は、海の日。ちようど、夏休みのときにお会いしましょう。

## 海へ

今日は、海の日！学校も夏休みで休みだ！！

そんなわけで、7月21日今日は、蘭たちと海水浴・海に来た！！メンバーは、蘭・園子・志保・新一・小五郎・王・キッド・マタドーラ・ドラリーニョ・ドラえもん・ドラパン、行くのに渋っていたドラメッド。生憎、ドラニコフは、仕事で行くことができない。ジエドーラもいけないと言っていた。あちこちで教室をやるからだと言っていた。

そんなわけで、近場の海水浴場に来た。

服部に連絡したら、行くと言っていた。電話したとき、和葉ちゃんもいたみたいだから、蘭に会いたいから行くと電話で言っていた。

海に行くと、服部がきていた。後ろには、和葉ちゃんもいた。服部の横には、服部が愛用しているマウンテンバイクがあった。

「工藤〜！」

服部が手を振って呼んでいた。

名前を呼ぶな、子供じゃないんだから・・・！

そんな思いをしながら、服部のところに来た。

まずは、ドラえもんたちのことを言わなくては・・・

「服部、覚えているだろ？」

ドラえもんたちの指していることは、服部にすぐ分かった。

「おー、覚えているで！ドラえもんやったな。よろしゅう」

「こちらこそ」

ドラえもんが手を出して、握手を求めた。服部が握手した。和葉が王を見ていることに気がついた。

「可愛い〜」

王に抱きついて、頬ずりしている。

王は、和葉に抱き付かれて、真っ赤になっていた。

「僕、女の子は苦手なんです〜」

泣き叫んでいる。

「和葉さん、離れてください」

和葉は、王から離れた。

「ごめんな。可愛くて、抱きついてしもうたん」

和葉の頬は、笑っていた。謝っている感じじゃない。

「それにしても、どうして私の名前知っているん？」

和葉は、疑問に思った。王は、しどろもどろになりながら、こういつた。

「え・・・っと、それは・・・新一さんから聞いたんです。平次さんの幼馴染が来るって言っていましたから」

「なあんだ、そうなんか。てつきり、平次の恋人かと思ったわ」

だった。こんなに綺麗やもんなど和葉が言った。

こんなときに恋人と間違えられたら、たまったもんじゃないと王は、思うのでした。

「平次の恋人じゃなく、俺の恋人だぜ？王は」

マタドローがしゃしゃり出てきた。

こんなときに出てこないでください！と王は、目で怒っている。後ろの皆は、またかという顔をしている。

ドラメッドは、水怖い・水嫌いが出て暴走直前に走っていた。それを隣にいるドラパンがドラメッドの手首をつかんで、逃げないようにしていた。

（早くしてくれ！いつまでもつか、わからないじゃないか！）

怒りを押し殺していた。

新一は、後ろをちらりと見た。それを目のあたりにした。

「早く行こうぜ！みんな、待ちくたびれている」

新一は、先を促した。

これ以上、ドラパンを怒らせないほうがいいと思って

（後で、何されるか分かったもんじゃないからな）

そんな思いを抱いて、更衣室に向かった。

男子更衣室に新一・服部・小五郎・キッド・ドラメッド・ドラパン・ドラリーニョ・マタドーラ・ドラえもんが入り、女子更衣室に蘭・和葉・志保・園子・王が入っていた。

最初は、王は女子更衣室に入るのを躊躇っていた。なんせ、女性がダメな王にとっては、拷問と同じだからだ。その上、女性の裸を見るのもダメなのに・・・自分の裸には、慣れたみただけど他の女性の裸は、ダメらしい。

だから、王は女子更衣室に先に入り、さっさと着替えて、外で待っていた。

「慣れないといけませんのに・・・」  
ため息と一緒に出てきた言葉。

いい加減、女性の体には慣れないと・・・。女性の免疫が出来てきたというのに、女性に触れることがまだ無理という抵抗があった。

「王」

男子更衣室からマタドーラ、ドラえもん、キッド、新一、服部、小五郎が出てきた。

小五郎は、ビールを買ってくると言って行ってしまう、新一と服部は、先に場所取りをしてくると言って行ってしまった。残された、王とキッド・ドラえもん・マタドーラは、ゆっくりと行くことにした。

「少しずつ慣れていけばいいさ。焦ることない」

マタドーラは、笑って王の頭をクシャリと撫でた。

王は、それを見て「そうですね」と綺麗に笑った。それを見て、マタドーラは赤くなった。マタドーラだけじゃなく、キッドとドラえもんも。

（綺麗だな・・・。それに可愛い）

今日の王には、今までになり魅力を感じていた。それにオレンジ色のビキニがとても、王に似合っていた。

ビーチに行くと、新一と服部がシートを敷いて待っていた。パラソルもあつた。

近くに人がいない。

「おーい、此处や」

服部が手を思いつきり振っていた。そこに王・キッド・マタドーラ・ドラえもんが歩いて行く。

「お待たせしてすいません」

「そんなことないで！それより、王ちゃん可愛えな」

服部は、言つた。此处に和葉がいたら、どうするんだ？と言わんばかりの形相で新一が服部を見ていた。

それを服部が見て、あかん此处で工藤を怒らせないほうがええやな、と内心焦っていた。

そこに蘭・園子・和葉、少し遅れて志保が来た。そのあとから、ドラパンがドラメッドの手を引いて、着た。ドラリーニョは、みんなの先頭を歩いて着た。

「ごめん！待たせて」

蘭が開口一番に言つた。

「そんなに待つてないよ。」

新一が柔らかい声で言つた。蘭は、新一の笑顔に見とれていた。

「さて、と。海に行こうぜ？」

「そうだね。行こう！志保さんは、どうする？」

「私は、此处にいるわ」

そう言つて、志保は、パラソルの下に入った。

（相変わらず、可愛げのねえやつ）

新一は、服部・蘭・和葉・園子と一緒に海に入つて行つた。

「私たちも行きましょう！！」

王が走つて海へ入つて行つた。それに続いて、ドラえもん・マタドーラ・キッドと付いていく。

生憎、ドラメッドは、海に近づこうとしない。見かねたドラパンは、ドラメッドに言つた。



「今日は、みんなと楽しむんじゃなかったのか？」

「そうであるが……。やっぱり、怖いものは怖いである。」

「分かった。無理にとは、言わない。けれど、一度入ろう？ 私と一緒に行くから」

「分かったである。手、放さないであるよ？」

ドラパンは、分かったの変わりに笑顔で頷いた。

ドラメッドは、ドラパンの笑顔を見て顔を赤くした。

ドラリーニヨは、二人を見て面白くないという顔をしていた。

（なんだよ、ドラパンにデレデレしちゃって。ドラメッドなんか、嫌い！！）

フンと鼻を鳴らして、ドラリーニヨはふて腐れた顔して、ドラえもんたちのところに行った。

「ドラリーニヨ、一緒にバレーボールやりませんか？」

王がドラリーニヨに話しかけてきた。

「うん、やる！」

と乗り気の声で応じた。ドラリーニヨは、輪の中に入って行った。

「私とドラメッドも一緒にいいか？」

そのあとから、ドラパンが話しかけてきた。ドラリーニヨは、ドラパンを見るなりムスツとした怒ったような顔になった。

「なんだよ、ドラパン。といたいところのを堪えた。もう、いいや。ドラパンが入るんだったら、僕やらないと言い、抜けて行ってしまった。」

王は、ドラリーニヨのそのさまを見て疑問を抱いた。

「どうしたんでしょう？ ドラリーニヨ」

「たぶん、ドラパンとドラメッドだよ。二人のラブラブを見ていてうんざりしてんじゃねえの？」

キッドが言う。確かにそれもあるが、根本的な部分は違う。

ドラリーニヨは、一人で海に入って泳いでいる。でも、その顔は楽しいという顔ではなく、怒ったような顔をしていた。ドラメッドは、心配していた。

（ドラリーニヨ、お主どうしたであるか？）

マタドーラが上げたボールがドラメツドの頭に見事クリーンヒットした。

「あたっ」

頭を抱えて悶絶するドラメツド。その様子をドラパンは、呆れたような顔でドラメツドを見ていた。けれど、それはとても幸せそうな顔をしていた。

「ボーっとしているからだ」

「油断したである」

ドラメツドは、ゲームに集中した。

ドラパンとドラメツド・キッドのチームは、ドラえもん・王・マタドーラのチームに勝った。罰ゲームとして、みんなの分のジュースを買ってくることになった。

ドラえもんたちが買ってくる間、キッドたちはゆっくりと話をしていた。

でも、ドラメツドの顔が晴れることがなかった。それを見たドラパンは、ドラメツドに言った。

「ドラリーニヨのことが心配なんだろう？話してきたらどうだ？」

「そうであるが・・・でも、話聞いてくれるだろうか」

「話さないと分からないこともある。けじめつけて来い」

「そうであるな。」

ドラメツドは、そう言っただらパンのそばから離れ、ドラリーニヨのところに行った。

ドラリーニヨは、近くに着たドラメツドの存在に気がついた。

何？と顔をドラメツドに向けた。

「どうして、そんなに怒っているであるか？」

「怒ってないよ。」

ドラメツドは、悲しい顔をした。

「今日は、みんなで楽しもうと思っていたであるよ？ドラリーニヨ、一人だけが淋しい思いをして欲しくないである」

心優しいドラメッドが言うつと、ずしりと心に熨<sup>の</sup>しかかってきた。ドラリーニヨは、顔をゆがめた。

「ドラメッドは、ドラパンの横で笑っていればいいだろう！！？僕なんか、ほっとけばいいだろー！」

こんなに怒りをあらわにしたドラリーニヨ、誰もこんなところを見たところがあつただろうか？いいや、誰一人も見たことはない。

ドラメッドは、そんな彼ドラリーニヨに歩み寄り、抱きしめた。

ドラリーニヨは、ドラメッドの腕の中で暴れた。

「何するんだよ？！ドラメッド、放して！！」

ドラメッドは、ドラリーニヨのいうことは聞かない。

「ドラリーニヨ！最近、お主おかしいであるよ？どうして、我輩を避けるのである？」

ドラリーニヨは、ハッとした。暴れることをやめた。

「それは・・・」

ドラリーニヨは、黙ってしまった。

ドラえもんたちが罰ゲームから帰って来た。海の中にいるドラメッドとドラリーニヨを見ている。

「ドラえもん、ほっときましょう。今は、二人に係わらないことですよ」

王がドラえもんと言った。

「そうだね。」

ドラえもんは、王のいうことに素直にした。みんなは、ドラメッドとドラリーニヨを暖かく見守っていた。

「僕、ドラパンが凄くうらやましかつたんだ。いつもドラメッドのそばにいたから」

ドラリーニヨがポツリと零した。ドラメッドに聞こえるくらいの大きさで。充分だった。

ドラメッドは、それを聞いて安心した顔になった。

「それは、ドラリーニヨにとって辛かったであろう？悲しかったであろう？」

ドラメツドの言葉にただ頷くだけのドラリーニヨ。

「我輩それを聞いて嬉しいである。お主にとって我輩は、とても大事な人という事であるから」

ドラリーニヨはそれを聞いて、嬉しい気持ちになってきた。顔が綻んできた。

そっか、僕はただ気が付かなかっただけなんだ。ただ、甘えていただけなんだ、ドラメツドの優しさに。これから、嫉妬という気持ちがないままドラメツドを好きでいられる。

ドラリーニヨは、これほどにもないくらい優しい感情に溢れていた。(大好きだよ、ドラメツド)

二人は、暫くの間抱き合っていた。けれど、それを阻むものがいた。そう、ドラパンだ。

「もう、いいのではないか？ドラリーニヨ」

悪戯な微笑でドラパンは、立っていた。ドラパンの後ろには、ドラえもん・マタドーラ・王・キッドが立っていた。みんな微笑んでいた。けれど、明らか一人だけ怖いくらい微笑んでいる人がいた。ドラパンだ。

ドラリーニヨは、気がついていいのかどうか知らないがずっとドラメツドに抱きついたまま離れようとしない。

「もう少しこのままでいさせてよ。どうせ、明日からまたドラメツドは、ドラパンのものになっちゃんだし」

ドラリーニヨは、講義の声を上げた。

いつも一緒にいるんだから、今日ぐらいいいだろうと、ドラリーニヨは、考えていた。

「そうだが……」

「まあいいじゃねえか！今日ぐらいいは、みんなのドラメツドという事にしておいてさ」

キッドが言う。ドラリーニヨの意見に賛成らしい。

諦めたドラパンは、好きにしろと言ってどこかに言ってしまった。

「よし、一段楽したところで遊ばーぜ！」

キッドが声を張り上げた。みんな「おー！」と言って意気込んだ。  
「あれ？ドラメッド、いませんね」

王が周りを見た。ドラパンが行った先を見たらドラメッドは、ドラパンの後ろを付いて歩いていた。

「本当に仲良しですね、ドラメッドとドラパンは」

王はそう言って微笑んでいた。

「そうだな。まるで、俺たちみたいだ」

マタドーラは、そういつて微笑んだ。

結局、今日はドラメッドとドラパンを二人きりにしてあげようという事になったのだった。

〈余談〉

ドラパンの後に付いていったドラメッドは、ドラパンとキスをしてセックスをしていたのだ。

そのことは、ドラメッドとドラパンしか知らない。

良かったね、ドラメッド、ドラパン。

## 海へ（後書き）

ドラえもんズ中心にして書きました。

どうしたか？海の日という事もありまして、舞台は海！！

こんな炎天下の日には、海という事です！

評価・感想・ダメだしお願いします！

次回投稿予定は、八月になります。八月のいつかは、わかりませんので了承お願いします。

それでは、失礼します！！

花火大会 前編 (前書き)

前後編です。

## 花火大会く前編く

此処は、米花町。

此処には、ドラえもんたちと暮らしている工藤邸が存在しているところでもある。

今日は、一体この家で何が起きることやら

「新一さん、起きてください！今日は、皆さんで出掛けるんですよ？」

「んんん、後もう少し・・・」

王ドラが新一のベッドの上に跨り、寝ている新一を揺すっていた。今日は、土曜日。最近やっと警察から事件があったことの依頼が減っていた。だから、今日は蘭・王ドラたちと一緒に出掛けることになっていたのだ。

「んもん、新一さんが起きないと、私たち出掛けられないんです~~~~！！！！いい加減におきてくださいよ！！！！」

王ドラはベッドから降りて、まだ寝ている新一を見て怒り気味に言った。

新一は、まだ寝ている。

「もう知りませんからね！！」

王ドラは、新一の寝室から出て行った。

ボタンと閉められた扉。新一は、ようやくベッドから這い出てきた。

「やっと行っただぜ！王ドラ、毎朝起こして来るんだもんね」

休日なんだから寝かしてくれよと、欠伸をかみ締めながら新一は、言った。

新一は、眠たい目を擦りながらベッドから這い出てきた。



パジャマから着替えようとタンスに手を伸ばしたとき、部屋の扉が開かれた。新一は、そっちに顔を向けてみると、キッドとドラえもんが立って、新一を凝視していた。

新一は、その光景に目をぱちくりさせた。

なんなんだ・・・？

「新一・・・なんだ、起きているじゃないか！」

「そうだね。ちゃんと起こしているじゃん、王ドラ。」

「じゃ、俺たちの役目ないな。行こうか、ドラえもん」

キッドは、部屋のドアを閉めて、階段を下りていった。

新一はまだ、扉を見ていた。

なんだったんだ・・・？

新一は、タンスを開けて、服を取り出して着替え始めた。

着替えて降りてきた新一を、王ドラが見つけた。するとすぐに王ドラは、新一のところに行って「はやく食べてしまってください」と

新一に言って、降りてきた新一の背中を押してテーブルのところまで着た。王ドラは、新一が食べるとすぐにどこかに行ってしまった。食べ終わって三十分後、王ドラは戻ってきた。

「食べ終わっただんですね。じゃ、片付けてしまいます」

王ドラは、手際よくテーブルの上にあったものをそそくさと台所へ持っていった。

十分後、王ドラは二人分のコーヒーを持って、リビングにやってきた。ソファには、新一が座っていた。王ドラは、新一にコーヒーを渡した。

（そういえば、みんなは・・・？）

新一は、疑問に思っていたことを王ドラに聞いてみた。

「なあ、ドラえもんたちは？」

隣に座っている王ドラに視線を向けた。王ドラから帰って来た返事

は、

「みんな、先に行くと言って出て行きましたよ。」

王ドラは、そう言って一口コーヒを喉に流した。

「じゃあ、急がなくちゃ！王ドラ、行くぞ！」

新一は、残りのコーヒを飲み干し、テーブルに置いた。右手に王ドラを掴みんだ。

けれど、そう簡単に済むはずがなかった。

王ドラは、立ち止まった。新一は、その反動で止った。王ドラを見た。

王ドラは、新一の顔を見て言った。

「待ってください！戸締りは、きちんとしましょう」

王ドラは、そう言って家中の鍵をチェックした。そして、新一のところに戻ってきた。

「OKです。じゃ、行きましょう」

王ドラは、笑顔を見せた。そして、今度こそ家を出た。

行き先は、園子の家。今日は、年に一度の花火大会。先に行くと言って出て行ったのは、なかなか起きてこない新一を王ドラに任せて、園子のある食事にありつきたかったためである。

## 花火大会〈前編〉（後書き）

いや、このままずっと一本だけでやるとちときついので、これからは前後編にします。それと、今回のストーリーは、番外編も用意しています。

## 花火大会〜後編〜

新一と王ドラが工藤家を出て、園子の家に向かう途中、遊びに来た服部と和葉に出くわした。

（ゲッ・・・なんで、此処にいるんだよ？）

まだ、服部たちは、向こうから来る新一に気がついていない。絶対、服部に会ったら王ドラとデートかと聞いてくるだろう。なんとしても、それだけは避けたい。新一は、そう思い歩道の横にある細い道に入ることにした。

「王ドラ！こつち」

新一は、王ドラの手を引いて入った。服部がこの道を過ぎ去るのを待つ。

服部がそこを通り過ぎた。安心してそこから、新一と王ドラは出た。そして、園子の家に向かい始めた。

「おつかしいな」。工藤此処にいると思ったのに・・・。何処行つたんやろ？」

服部は、さつきまでいた細い道に入り、新一を探していた。さつき通った道を振り返りもせずに・・・

馬鹿な服部平次。ざまあねえな

道を進むにつれて、新一の知り合いに見つかってしまった。

「あー、新一お兄さんだ！」

「本当だ！王もいるぜ！！」

歩美、元太、光彦。今日は、三人で公園で遊んでいた。

新一は、三人を見つけた。歩美たちは、走って新一のところに着た。「こんにちは、歩美さん、元太君、光彦君。元気にしていましたか

？」

「おう！元気だぜ！」

王ドラの挨拶に笑って元太が答えてくれた。

「今日は、お二人でデートですか？」

光彦が質問してきた。こりゃ困ったぞという顔をして、新一は光彦を見た。

「違うよ。これから、園子の家に行くところなんだ」

「そうなんですか。」

「でもなんで、園子お姉さんの家に行くの？」

「今日は、花火大会なんです。園子さんの家から見えると言う花火を見るんですよ」

「そっか。花火大会！王さんたちも見に行くんだ！」

「そうなんです」

歩美と王が楽しげに会話に花を咲かせている。新一は、見守るように二人を見ていた。こうしてみると、本当の恋人同士にしか見えない

「そろそろ行くか」

「そうですね。じゃあね、歩美さん、元太君、光彦君」

王ドラは、立ち上がりスカートの裾を叩いた。そして、歩美たちに別れを告げて新一と去っていった。そんな二人に歩美は、手を振っていた。

三十分歩いたら、園子の家に着した。

ドラえもんたちと合流して、土手に花火を見に行った。蘭と園子、

王は、浴衣を着て

王の浴衣姿は、とても淒く可愛らしかった。落ち着いたオレンジの布地に黒の帯が淒くあっていた。オレンジの布地には、ポップな紫の薔薇の絵が描かれていた。これまた髪型が普段の三つ網を解き、

大人っぽく後ろに流して紅い薔薇の簪を右側に挿していた。

王ドラの魅力を最大限に引き出していた。その姿を見た新一、ドラえもん、マタドーラ、キッド、ドラメッド、ドラパン、ドラリーニヨ、ジエドーラ、ドラニコフは、口をあんぐりと開けていた。

「どうですか？」

王ドラに聞かれて、開けていた口からみんなそれぞれに王ドラに賛辞を言った。

「凄く似合う！」

「うぬ。王ドラの魅力が引き出されておる」

「いや、いつもの王ドラじゃねえ」

マタドーラに至っては、王ドラにキスを迫っていた。

花火大会〜後編〜

## 花火大会〱後編〱（後書き）

前回の続きです。評価・感想けると嬉しいです。  
番外編もありますので、そちらのほうも宜しくお願いします。

## 花火大会く番外編く

その頃の鈴木家。

新一と王ドラがまだ、工藤家に居るときのお話。

朝も十二時を回った頃、王ドラを除いたドラえもんズメンバーは、鈴木家にやってきた。

流石に、一度来ても場所を覚えられない。鈴木家の場所が分からないドラえもんズは、蘭と一緒に来た。

チャイムを鳴らしたら、中から園子が出てきた。走って

「着たわね。いらっしやい、蘭、ドラえもん、マタドーラ、キッド、ドラリーニョ、ドラメッド、ドラパン、ジェドーラ。あれ？新一君と王ドラさんは？」

「後から来るって、王ドラさんが言っていたよ。」

「そう。新一君のことだから、まだ寝ているんでしょうけど」

園子は、お茶らけた声で言った。蘭もそうだねと頷いていて、笑っていた。

信用ないな、新一。合掌

キッドが心の中で思ったことだった。

「さあさ。中に入って待っていきましょう。」

園子を筆頭にして、鈴木邸の中に入った。

「うわあ。凄い！」

「でけえ！！園子の家って」

「何度来ても、大きいや」

ドラえもんたちは、それぞれ感嘆な声を上げた。

「あれ？知らなかった？私、鈴木財閥の娘だもの」

言っただけだったかな？と顔をしかめた。リビングに着くと、みんなそれぞれに寛ぎはじめた。

蘭は、園子とおしゃべりをし、ドラえもんは、キッドとジェドーラと話をし、ドラパンとドラメッドは、仲良く話をし、ドラリーニョ



は、四次元ポケットからサッカーボールを取り出して、ヘディングをはじめた。マタドローは、シエスタをはじめた。ドラニコフは、本を取り出して、読んでいた。本当にすることないんだな

それから、すぐに新一と王ドラが鈴木家に訪れた。

## 花火大会（番外編）（後書き）

どうも、こんにちは、春崎やよいです。もう、八月まで待てなくなり早めに投稿しました。

ー予告

暫く、コナン（スパイラルは、お休みします。すみません。それと、新しく小説を書きます。えーと、なんのかといいますが・・・、秘密です

ごめんなさい、企業秘密なのであんまりおおぴろげにできないんです。今まで、言ってきましたが、今回は、本当に言えないことなんです。こんな作者で、飽き飽きだと思いますけど、見捨てないで下さい！（大泣き）

ごめんなさい、世界中の皆様に謝ります！！ごーめーんーなーさいー！！（アホだ）

いやー、なんか変なのが入ってしまいました。

それでは、このへんで失礼します。

春崎やよい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4673e/>

---

名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議な日々～part 3

2010年10月9日05時22分発行